

雨の日のカタツムリ

ある休日のことです。私は調べたいことがあったので図書館へ行きました。その図書館は小高い丘の上であり、最寄りのバス停から図書館までは、様々な種類の木が植えられた緩やかな坂の歩道が続いています。

その日は小雨が降っていました。図書館での調べ物をすませた私は、傘をさしながらバス停に向かって歩道を下っていました。

ふと見ると、一組の親子が歩道を上ってくるのが見えました。私は、小さな傘をさした幼い子どもの姿をほほえましく見ていました。すると、歩道の真ん中で、突然その子どもがしゃがみこんでしまったのです。

「具合でも悪くなったのだろうか。」

私は、下を向いて小さくうづくまるその姿を心配しながら歩いていました。そして、親子の近くまで来た時、子どもが、地面をはっているカタツムリの殻を、小さな手でつまんだりついたりしているのが目に入りました。

「なんだ。カタツムリと遊んでいたのか。」私は、ホッとしました。

はじめは一緒にカタツムリを見ていた親も、しばらくすると子どもが飽きるのを待っているような様子で横に立っていました。そして、

「もういいやろ。行くで。」

と、言葉をかけて子どもの手を引いて歩き出そうとしました。子どもも仕方なく立ち上がり歩き始めましたが、自分と距離が離れていくカタツムリの方を名残惜しそうに振り返っていました。

そして、その子どもが私の横を通り過ぎる瞬間、ぽつりと小さな声でつぶやきました。

「ふまれへんかな。」

聞き取れないくらいの声でしたが、そのつぶやきを聞いた私はハッとしました。

「もしかしたら、歩道の真ん中をゆっくり歩いているカタツムリが誰かに踏みつぶされてしまうのではないかな。早く安全なところへ行ってほしい。この子どもは、そんな気持ちでカタツムリを触っていたのかも知れない。」

と、私はその時初めて気づきました。

家に帰った私は、この話を高校生の子どもにしました。そして、「あなたの小さな頃を思い出したわ。」と子どもの幼いころのことを話しました。すると、ふだんあまり話をしない子どもがうれしそうな表情で、最近の学校の出来事や考えていることをいろいろ聞かせてくれました。

今回の幼い子どものつぶやきをきっかけに、短い時間でも自分の子どもと話すことができ、子どもとの心の距離が近づいたように感じました。

子どもが見せる姿にはどのような思いがたまっているのか。その思いを受け止めるために、子どものペースに合わせて付き合うことで見えてくるものもあるかも知れません。なかなかその時間を取るのも難しいところがあるけれど、まず、子どもに寄り添ってみることから始まるのではないだろうか。そんなことを思った、ある雨の日の出来事でした。